

かげやどり

小桜 陰子

明日は久しぶりに学校がある。とは言っても大型の休みではなく、単なる連休明けだけ。昨日友達と遊んだから、特に恋しいわけじゃない。でもやっぱり学校で会うのは違うんだ。

昨日は明美と真理子と美智とで隣町へ遊びに行った。休みにしては朝早く起きたせいで、お母さんにびっくりされた。

「あんだ、いつもならこの時間寝てるじゃない。旅行の時だつて時間ぎりぎり、アタシが起こすまで起きなかつたし。この分じゃ明日は何かあるんじゃないの？」

そんな事を言われたけれど、お母さん、世間も私も変わりないよ。

昨日は隣町にお店の開店時間から閉店時間までずっといた。門限は七時までだけど、親へはメールしておけば許してくれた。いざというときのための合鍵も忍ばせてあったから、万一閉め出されても大丈夫な気はしてた。

そのせいだと思う。今日、昼まで寝ていたのは。勉強

机に置いてある目覚まし時計は一時あたりを示している。だけど私の体はだるいままだ。

さつきから充電しっぱなしのケータイは、どうやらお腹がいっぱいになったらしい。電池満タンでランプが消えた。ついでに、私が遅いお昼を食べているうちに、誰かからメールが来ていたらしい。メール受信を知らせるランプがチカッチカツと思いついたように光っている。

……どれどれ。

なんだ、鈴江じゃない。明日の数学の宿題やった？つて、どうして私があんたに勉強の進度を逐一教えなきゃなんないの？私はそのままケータイを閉じ、オレンジ色のマシユマロクッションに座つて雑誌を開いていた。

鈴江は私たちのグループの一員だ。だから友達かもしれない。傍目から見れば、鈴江と私たちはとても仲がいいように見えると思う。鈴江はちょっと抜けてるところが多いから、私たちがそれに対していちいち突っ込む。

「おまえら、疲れるつてことが無いんだな」

先生からそう皮肉も貰うから、私たちはクラスの中でもハイテンショングループみたいだ。でも、先生だつてきつと実情は知らないと思う。

私たち、鈴江が嫌いなんだよね。

極端ないじめに発展しているわけではないと思う。靴を隠したり、トイレに閉じ込めて水を掛けるなんて露骨なこと、できるわけじゃないじゃない。そんな事して確実に足が付くようだったら、内申書の評価下がっちゃうしね。私たちはただ鈴江にメールの返事を返さなかったり、遊びに行くのを誘わなかったりするだけ。次の日鈴江の前で、わざとらしく遊んだことを大げさに話したりするけれどね。あと、鈴江が何かしでかしたときなんかは『くず江』と呼ぶことくらいしかしない。

でもきつとクラス内の女子たちには私たちが鈴江が嫌いだってこと、伝わっているんだと思う。私たちのグループではないけれど、けっこう仲いい子が鈴江のことをあまり好きじゃない、と言っていたのだから。

鈴江と仲良くなったのは、クラスが変わってすぐだった。今のグループの中で、私以外は去年同じクラスだったように、クラス替え初日にはまとまっていた。そんな時、たまたま席が隣だった明美と休み時間に意気投合して、私はグループの一員になった。その時の鈴江の印象は、すっかりしてる天然不思議ちゃん、だった。

何となく鈴江が疎ましく思えてきたのは、体育祭ころ

だった。私の学校は六月という梅雨の真っ最中に体育祭を行う。まず晴天の日はいないので、開会式での校長先生の挨拶にも

「運動するには快適な天候で……」
の一文が隠れている。

今年の体育祭は珍しく早朝から晴れていた。私は放送委員だったから、朝早くから朝礼台横のテントで機材のチェックや打ち合わせをしていた。

「おはよう」

そう言つて美智と鈴江がやって来た。私たちはしばらく他愛の無い話をした。開会式の五分前になり、二人はクラス席へと戻つていった。

「なんぶ……す、ず……え、……決めた」

二人の後姿を見ているとき、しわがれた低い声で誰かが鈴江をフルネームで言ったのが聞こえた。けれど私はその声を空耳だと思つたのだ。

私の学校の体育祭には、変な種目がある。全員二人三脚がそれだ。男子と女子に分かれ、それぞれ全員の足をタオルか何かで縛つていく。三十人三十一脚の亜種であると思うのだが、これがまた難しい。ずつこけるのはもちろん、一人でもスピードを緩めれば全員で作つたライ

ンは崩壊する。体育祭の練習は全てこれに注がれたといつても過言ではないだろう。

「一・二！一・二！」

それぞれのクラスがリズムの掛け声を張り上げる。そんな中、私たちのクラスは途中まで二組とトップ争いをしていた。五十メートルを走りきり、残りの五十メートルをターンして走りきらなければならない。幸い二組はターンがバラバラで体制を崩した。私たちの組は素早くターンを終えると、一気にスピードを上げた。横から見える組はない。あと少しだ。

ゴールまであと十メートルというときだった。中心がバランスを失い、列が一気に中心へ引つ張られる。きゃあ、とか、わあ、なんて声が水の波紋のように列へ伝わる。ラインは崩壊したのだ。体勢を立て直す間に、横で二組がゴールした。

「全員二人三脚、優勝は二組です」

後輩の放送委員の言葉がグラウンドに響き渡った。本当はそこに入る組は私の組だったのに。誰なの？

「あはは、本っ当にゴメン！」

ラインの中心で謝ったのは鈴江だった。美智や明美、そして真理子は普通に笑顔で許している。

「平気だって。二人三脚では一番にはなれなかったけど、私たちって総合的に見れば結構リードしてるもんね。それより怪我してない？」

なにかもやもやしているのに、私の口からは自然とそんな言葉が出ていた。いつの間にか、空には灰色の雲が占拠していた。そのせいで、地面には薄い影しか出来ていない。空から地面に視線を移すと、何かトカゲのような影がクラス席へと移動する鈴江の影の中へ入っている、目玉を光らせたような気がした。あまりにも気持ち悪かったから瞬きしたが、そこにあつたのはただの鈴江の影だった。

「くくくくく……」

誰かが、声を抑えて笑っていた。

その日から、私の鈴江に対するもやもやした気持ちが生まれた。もやもやは日を追う毎にくつきりとした形になり、研修旅行を終える頃には『嫌い』の一言で収まる物に育っていた。

私のもやもやが育つのと平行して、鈴江の性格も変わっていった。最初のしつかりした天然不思議ちゃんな感じが、今じゃすっかり影も形も無くなっている。天然不思議ちゃんって、結構人の目を気にしないところが多い。

悪く言つたら空気が全く読めないというのか。だけどそれが逆に新鮮で、空気を讀みすぎた自分に対して肩の荷を降ろしてくれるのだ。

けれど今の鈴江はそうじゃない。空気を痛いぐらい読んでるくせに、不思議ちゃんを作り出している。例えば皆がテレビ画面を見ていても、鈴江はチラツと他の人たちの顔を見る。その後素つ頓狂なことを言い出すのだ。鈴江以外と遊んだことを話すときも、鈴江は怯えたような目をしながら、無理やり笑顔を作っている。それがまた私たちの神経を逆撫でする。だから、あなたの笑顔のために話したんじゃないよ、バカ！ 下校途中にこんなメールを送るのだ。

それでも次の日には笑顔で私たちは鈴江と接する。ありえない。神経おかしいんじゃない？ 本当、ゴキブリ並みの凶太さしかとりえが無いクズだよ、あれつて。鈴江がトイレに立った途端、私たちは口々に鈴江の悪口をまくし立てる。鈴江が教室内に入ってくるまで話すけれど、聞こえているのかは解らない。もし、聞こえているとしたら、私はあいつの神経が信じられない。いや、今となってはもう鈴江の存在自体が気に食わない。こうしているうちにもまた、ケータイがメールの受信

を知らせた。

「明日の席替え、同じ班になれるといいね」

明美からのメールだった。そうか、明日は席替えだね。できれば鈴江以外の皆と同じ班になりたいけど、無理かもしれないのはわかってる。無理なら無理で、誰か一人でも同じ班ならいい。できれば明美とがいいけどね。どっちも無理そうなら、結構するけれど視力悪い人への特例を使わせてもらおうと思う。

「そういえば明日席替えだね、忘れてた！ 私も明美と同じ班になれたらいいなって思ってた。そういえば、数学の宿題やった？ まだ全然終わってないけど、あたらないければオツケーだよね?!」

こんな返事を打ち終えて、送信ボタンをポチツと押す。送信し終えたのを確認して、私は再び雑誌に目を通した。天気予報は晴れだといっていたけれど、いつの間にか空には雲が増えていたようで、私の部屋は随分と薄暗くなっていた。このまま雑誌を読んでいると、また視力が落ちてしまう。私は部屋の明かりをつけるために立ち上がった。

「くくくくく……………」

押し殺したような笑い声が私の耳元で聞こえた。一体

誰？

部屋の中を見渡したが、薄暗いだけで別に何もいるわけでない。いや、もし幽霊がいたらいたで怖いけれど。

気のせいだと思いつつながら電気をつけた。いや、気のせいではなかった。

窓ガラスに、大きなトカゲの影が張り付いていた。ぼやっとした影だったが、目のところははっきりと輝いている。気持ち悪い……。

ぎらぎら輝くトカゲの目と私の目が合った。体育祭の日、私はこのトカゲが鈴江の影の中へ入っていくのを見た。その日から私たちは鈴江を嫌うようになっていた。理由は、特に無い。ただ、鈴江の性格で嫌な部分ばかりと見えてきたから。そう、まるで影が重なってより暗さを増すように。

すると、急にトカゲの影は動いた。

「くくくくく……」

トカゲは笑いながら私の影に入り込んだ。完全に入り込む直前まで目を光らせる。

完全にトカゲが私の影に入り込んだ後、はっきりとした声が耳元で聞こえた。

「次は、おまえ」

そのとき、ケータイの着信音が部屋に響いた。